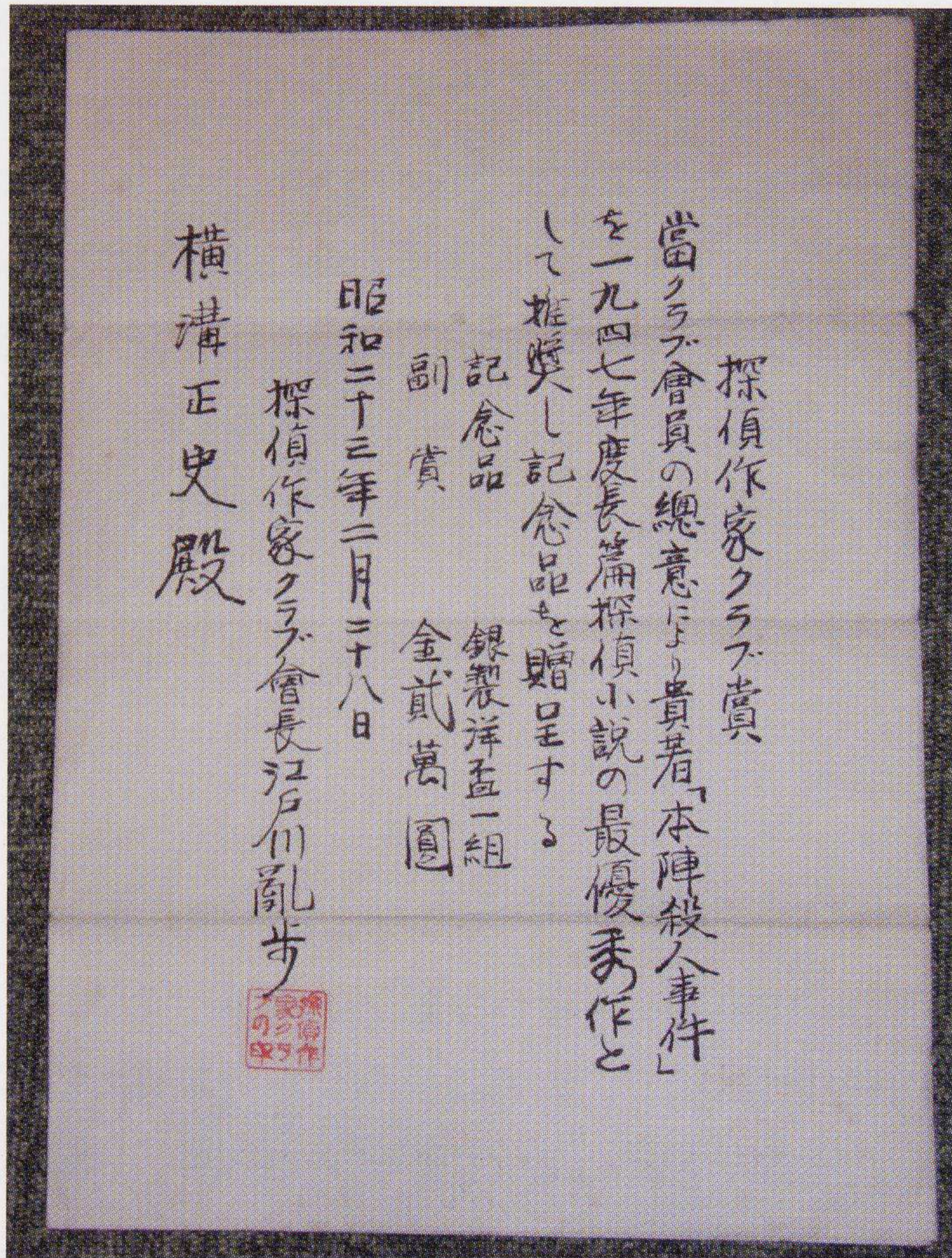


二松学舎大学附属図書館

季報

2008(平成20)年11月

『探偵作家クラブ賞』表彰状



『ブロンズ像』(ポー像)



『源氏物語』の紅葉 鈴木日出男 ②

『伊勢物語』に登場する食べ物のしくみ 原 由来恵 ③

故郷の食物考 谷口 貢 ④

ヴェズレーの丘 神戸 仁彦 ⑤

柏市と4大学 合同企画展 開催 ⑥

横溝亮一氏講演会 ⑦

開館日 案内 ⑧

読書週間

開館時間変更

横溝本発行案内

表紙解説

No. 70

文学研究科 特任教授 鈴木日出男

『源氏物語』には、初冬十月、華麗な紅葉を背景に豪華な宴がいくつも設けられている。最もよく知られているのは「紅葉賀」巻の、桐壺帝が朱雀院に住まう先帝のために催した賀の宴。盛んな御代と謳われた桐壺帝の、その晩年にふさわしい晴儀であった。

その場の光源氏は、紅葉の輝きのなかで、親友の頭中將を相手に、「青海波」を舞った。これは、二人で海波の動きを模して舞う雅楽。「色々に散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆる」と語られ、源氏の美しい舞姿はこの世のものとも思われぬ。また、「日暮れかかるほどに、けしきばかり時雨で、空のけしきさへ見知り顔」とあり、源氏の美しさには天空までもが感心するほどだとする。「時雨」は、長雨ではなく、天気雨のようにさっと降りそそぐ程度、それが夕映えの紅葉をいっそう鮮かに輝かせてくれるのだ。

また「藤裏葉」巻では、やはり冬十月の紅葉の盛りごろ、朱雀院・冷泉帝がともに源氏の壮大な邸六条院に行幸した。人々は源氏がかつて行幸で「青海波」を舞った昔日思うが、ここでも時雨が「折り知り顔」に降りそそぐ。さらに、「若菜上」巻の紫の上の主催による源氏四十賀の宴では、夕霧と柏木が舞うのを、「入り綾をほのかに舞いて、紅葉の蔭に入りぬるなごり、飽かず興ありと人々思したり」とあり、ここでも二十年前の紅葉賀の折が回想される。このように『源氏物語』の紅葉の宴は、時代の盛んさや人生の栄耀を語っている。

もとより紅葉は、晩秋から初冬にかけての彩りとして、古来、和歌の絶好の素材となり、特に『古今集』以後の表現には多様な趣向が凝らされてきた。

龍田川錦織りかく十月時雨の雨をたてぬきにして

(古今・冬 読み人知らず)

は、龍田川の紅葉の美しさを、初冬十月の時雨が縦糸・横糸として織った錦織であると見立てた。そして龍田の地を紅葉の名所だとする歌枕の観念もできあがっている。また次の歌のように、「露」との組合せ、あるいは神に手向ける「幣」への見立てなどもある。

白露の色は一つをいかにして秋の木の葉を千々に染むらむ

(古今・秋下 藤原敏行)

このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

(古今 覇旅 菅原道真)

人々は、この紅葉を一年最後の彩りととらえ、その秋がやがて冬へと移るのだと感じた。

これを考えるためにも、『古事記』中巻の、秋山之下氷壯夫と呼ばれる兄と、春山之霞壯夫と呼ばれる弟との、伊豆志袁登売をめぐる妻争いの話が参考になる。春の神である春山之霞壯と伊豆志袁登売との神婚を、秋の神である秋山之下氷壯夫が祝福することによって、秋の豊かな実りがもたらされたという。したがってこれは、一年の農耕生産の過程を神の偉大なしわざとして人格化した神話ということになる。人々は、春まで浅く霞のたなびくころ、一年の予祝をして農作業に従事しはじめ、晩秋の紅葉の美しい彩りのころ、豊祝して一年の農作業に終止符をうつ。こうした農耕生活の歳時の上に、この神話が成り立っている。紅葉は、一年最後の彩りでもあるゆえんである。

もう一つ、『源氏物語』「若菜下」巻の住吉神社への参詣の一節をとりあげよう。源氏が、わが六条院の栄華も実は明石一族との宿縁によってもたらされたと自覚するところから、この願解きの参詣がなされたのである。十月半ば、「神の斎垣に、はふ葛も色変りて、松の下紅葉など」鮮かな秋色を見せている。ここでも紅葉の華麗さが源氏の卓越した栄華と照応しあっている。ところが、一晩じゅう歌舞の遊びで夜明け近くになると、「霜のいとこちたくおきて、松原も色紛ひて、よろづのことそぞろ寒く」なり、冬の景色に一変してしまう。紅葉は、一年の滅びに向かう最後の光茫のようにもみえる。この一節の次で、六条院の女主人とも呼ばれる紫の上が、わが人生の孤愁を顧みて出家を切実に思うのも、このことと無縁ではあるまい。



文学部国文学科 専任講師 原 由来恵

平安時代(その中でも9世紀~10世紀の間)に何度も手を加えられ、今日の形に成立したとされる『伊勢物語』。その内容は、「初冠(男性の成人儀礼)」から「つひにゆく道(辞世)」までを、一話完結のショートショート約125章段(話)で綴った、ある「昔男」の一代記風となっている。その一話ずつは、主に男女の恋愛のやりとりが占めているが、時には友情、人生観なども描かれており、現在の私たちにも、年齢に関係なく多くの共感や感動が得られる作品である。この最大の特徴は、和歌が物語の主軸となり、その〈歌〉を核に〈歌〉の背景を語って物語が展開していることである。そこからこの物語を、文学史上では「歌物語」というジャンルに分類している。また作品中に登場する〈歌〉は、『古今和歌集』や『後撰和歌集』に収載されている〈歌〉との重複も多く、特に物語に採歌されているのが在原業平である。そのため、「昔男」=「業平」という図式が定着し、業平に仮託された物語ともいわれるようになった。

その「歌物語」である『伊勢物語』にも《食べ物》が登場する。それらの食べ物を、大別すると以下の通りである(注1)。

- ①海産類 ひじき藻(3)・海松(25・70・75・87・104)・藻(57・65・87)・塩(112*塩竈は省いた)
- ②穀物類 乾飯(9)・飯(23「飯匙とりて筒子のうちはものにもりける」)・飾り粽(52)
- ③果物類 橘(60)・小柑子 栗(87)
- ④酒類 かわらけ(60)・大御酒(82・83・85)酒(81・82・101・115)・盃く坏(44・69)・馬のはなむけ(44饗宴)
- ⑤その他 雉(98)

他にも、女が鬼に一口で食われたとする章段もあり、鬼にとっては「女」が食べ物だったということになるが、ここでは省くことにする。

さて、これら物語に登場する《食べ物》をみていくと、種類が少ない割に海藻の登場の多さに気づく。しかし海藻登場箇所は、食べる行動をメインに海藻が登場するのではない。和歌に詠み込まれ、歌語として登場していることに注目ができる。

例えば「ひじき藻」の場合。昔男が、恋慕する女に「ひじき藻」を贈るが、その時に「思ひあらば律の宿に寝もしな

む ひじきものには袖をしつつも」という歌をつけた。

と、「ひじき藻」は登場する。歌の「ひじきもの(引敷物)」と掛詞となっているのであるが、ここでは二人の袖を重ね引くことに意味があり、それを「ひじき藻」ということばから想起させ歌に詠み込む面白さが見える。

また他の「海松(布)」や「藻」も、「海松(布)」は「見る(目)」に掛けた掛詞で詠まれ、また「海人」や「浦」「刈る」などと縁語で詠まれることも多い。『万葉集』にも「(略)綿もなき布肩衣の海松〔ミル〕のごとわわけさがれる(略)〔八九二〕とある。「藻」も同じく古来より「玉藻」「藻塩草」などとして詠まれてきたものである。

他の「橘」などもこれらのように古歌からの歌の想起の役割を果たしている。

ではその他の列挙した《食べ物》群はというと、「乾飯・飯・酒」は食べる動作描写と共に物語に登場するが、詳細な食べ物そのものの説明があるわけではない。むしろ物語の状況説明の役割を果たしていると言えそうである。例えば「乾飯」は大泣きしたことを表すし、「飯匙」は女がイニシアチブを取った象徴ともいえそうである。また「酒」は友人とのやりとりに「盃」とは区別して登場している。

このように、『伊勢物語』における《食べ物》には、

I. 歌語としての役割

II. 物語を盛り上げるためのアイテム

というように「歌物語」だからこその働きを持つしくみがあるといえる。このような視点から『伊勢物語』を読むと、また新たな楽しみを見出すことができるだろう。

注1()内の数字は章段数を示す。章段数は新編日本古典文学全集(小学館)に依る。なお引用本文は私に字句を改めたところがある。



文学部国文学科 教授 谷口 貢

食の安全が見直されている現在、その土地で採れた食物をその土地で消費する「地産地消」のあり方が再評価されるとともに伝統食への関心が高まっている。いまや金銭的負担と時間をおしなれば、世界のあらゆるエスニック料理を口にすることが可能な時代を迎えている中で、日本の地域社会に伝えられてきた多様な伝統食に対して熱い視線が注がれているのである。まさに地球規模で市場経済のグローバル化が進行する中で、ローカル文化への関心が食文化の分野でも起こっていることに留意しなければならない。

故郷の食物で思い起こすのは、正月の祝い料理として食される「雑煮」である。私が生まれ育った新潟県糸魚川市の郷里の雑煮は、大根と人参の千切り、自家製の焼き豆腐、そして焼いた切餅を醤油仕立ての澄まし汁に入れて煮込んだものである。この雑煮を食べるのは、正月の元旦と三日、七日の3回であった。私は民俗学を専門に学ぶようになって、餅の形、取り合わせる具、汁の仕立て方など、雑煮が地方色豊かな郷土料理であることを改めて知った。

雑煮の食べ方には地方色があり、餅の形に注目すると、おおむね西日本は丸餅であるのに対し、東日本は四角に切った角餅を用いる傾向がみられる。四国の香川県では、餡入りの丸餅を入れる特色のある雑煮になっている。雑煮の汁には醤油仕立てと味噌仕立てがあり、近畿地方とその周辺では味噌仕立てが多く、その他の地方では醤油仕立ての澄まし汁になっているようである。味噌には赤味噌と白味噌があり、京都の白味噌仕立ての雑煮が知られている。山陰地方の鳥取・島根の両県では、善哉風にこしらえた小豆汁の雑煮を食べているところがある。文化庁は全国から募集した「お雑煮100選」の選考結果を平成17年2月にホームページで公開している。全国102種の雑煮の作り方と伝承がカラー写真付きで紹介されており、各地の多種多様な雑煮を知ることによって日本社会に育まれてきた豊かな食文化の一端を垣間見ることができる。

雑煮という語の初見は、京都吉田神社の神官家の家伝『鈴すずかかき鹿家記』の貞治三(1364)年正月二日の条にある「雑煮御酒被下」とされるが、この記載だけでは雑煮がどのような料理であり、正月の儀礼食とされていたのか、あるいは

餅が入っていたのかどうかについては不明であるといわざるをえない(篠田統『増訂米の文化史』1977)。雑煮の語が散見されるようになるのは室町時代以降で、たとえば永正元(1504)年の奥書をもつ料理書『食物服用之巻』には、来客をもてなす初献の膳に「餅、まるあはび、いりこ、やきくり、やまのいも、さといも、大まめ、汁たれみそ」の雑煮が記されている(『続群書類従』十九輯下、所収)。いわゆる味噌仕立ての雑煮であるが、これはあくまでも来客用の膳であり、正月の儀礼食ではなかった。キリシタン布教のために来日したイエズス会の宣教師たちが慶長八(1603)年に刊行した『日葡辞書』には「ザウニにつぼ(雑煮)」の語があり、「正月に出される、餅と野菜とで作った食物の一種」と説明されている(『邦訳日葡辞書』1980)。

こうしたことから推測すれば、正月の儀礼食として雑煮を作って食べる習わしが形成されたのは16世紀の後半頃ではないかとみられ、全国的に広がるのは近世に入ってからのものである。

大学で民俗学を教えるようになり、食文化との関連で雑煮を取り上げると、学生たちは結構関心を示してくれた。そこで、実際に食されている「我が家の雑煮」について、学生たちに報告してもらおうと、現在でもほとんどの家庭で正月の儀礼食として雑煮が食べられていることを知った。冠婚葬祭をはじめ多くの人が集まる「ハレ」の機会に作られてきた種々の行事食が衰退している現状を考えれば、正月の雑煮が続いていることはむしろ驚くべきことかもしれない。



国際政治経済学部国際政治経済学科 教授 神戸 仁彦

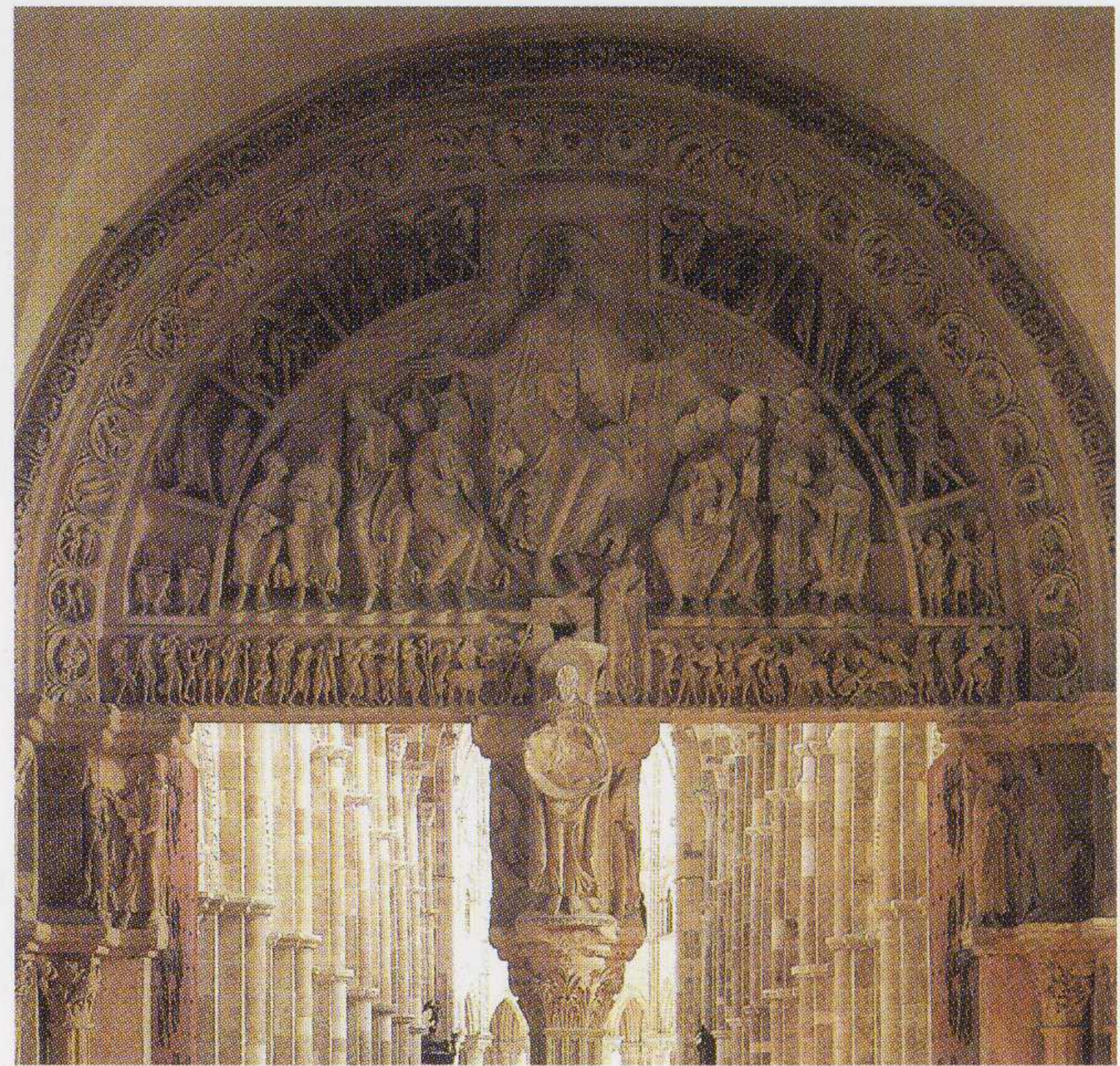
ヴェズレーの聖マドレーヌ教会を訪れたのは、十月三十一日の午前。静かな佇まいの中で、堂内を廻り、ロマネスクの彫刻群をつぶさに見ることができた。しかし翌日は様子が一変する。人が慌しく出入りしている。堂内身廊の椅子を運び出し、北の側廊に楽器やコードを運び入れ、ステージを設営している。十一月一日は万聖節(全聖人の祝日)なので、その準備にかかっているようだ。聖堂広場前の車もすべてなくなっている。なにが行われるのだろうか。

始まったのは午後の四時ごろから、降りしきる雨の中、青いベレーのボーイスカウト風の若者が、地区の旗を掲げて、同じ歌を歌いながら続々と広場に集まってくる。丘の斜面を登ってきたのだ。全身が湯気を立てている。夜の闇につつまれた八時ごろ、昂揚が最高潮に達すると、先頭の若者が階段を上がり、聖堂中央の大扉をドンドンと叩き、大声で内部と二言三言言葉をかわす。すると扉が大きく開かれ、照明に灯のともされた堂内が浮かび上がる。若者たちは待機したオーケストラをバックに歌いながら、左右にならぶ聖職者のあいだを進み、祭壇の前に整列する。これから夜を徹して、ミサをあげるらしい。退散して宿に戻ると、無人だった。おそらく町中が空っぽなのだろう。このような熱気はどこからくるのだろうか。鍵はナルテックス(正面入口の奥の玄関の間)のタンパンが与えてくれる、と次第に考えるようになった。

彫られているのは『新約聖書、マタイ福音書』の最終章「聖霊降臨」のイエスの言葉「私は天においても地上でも一切の権威を授けられている。だから、行って、すべての民族を弟子となし、父と子と聖霊へとむかって洗礼をほどこし、私があなた達に教えた一切のことを守るようにと教えるように。」の彫像化。中央のイエスは圧倒的である。両手を広げ、指先から線状の聖霊を弟子達の頭に浴びせながら、まさに両の爪先を地に着けようとしている。衣は渦巻きと夥しい襷を織りなし、それが左右をかこむ弟子たちの衣に伝播している。弟子達の頭部が欠けていても、迫力充分である。でもここで注目したいのは、このタンパン全体の構成である。「降臨」の外側は三層の半円に仕切られ、一番外は装飾的模様、その内側は四季と農作業それに「黄道十二宮(ゾディアック)」の組み合わせ、イエスの頭部と交差

するその内側の半円と楣(タンパンを支える横柱)には中世ヨーロッパ人の知る「すべての民族」が刻まれている。ユダヤ人、カッパドキア人、アラブ人、インド人(なぜか頭は犬)などが半円に収められ、楣には捧げものを手にしたローマ人やスキタイ人の一行、さらに右端には、馬に乗ろうと梯子をかけたピグミーと起きだしたばかりの大耳族、子は耳を閉ざして眠っているし、母の胸は剥き出しのまま。この二民族は「降臨」に立ち会えないのだ。明らかに時間だけでなく、空間的な差異も意識されているのである。

カトリックとは普遍的である、という意味だ。別の言い方をすれば、どこにでも存在しなければならないということなのだ。だから頭が犬のインド人にも洗礼をほどこさなければならないし、ジパングへも布教に赴かなければならない。このタンパンは明らかに世界を水平に、正面から扱おうとしている。オータンにもコンクにも見事なロマネスクのタンパンがあるがいずれも「最後の審判」をテーマにしていて、現世と来世、天国と地獄の縦軸を重視している、ヴェズレーの水平軸この視点が人をここに引き寄せ、世界へと向かわせるのではないだろうか。1146年の復活祭、聖ベルナルはこの地で第二次十字軍派遣を熱く説き、1190年には第三次十字軍のイギリス軍とフランス軍はここで結団し、中東へと出陣している。熱気は霧散せずに漂い続ける。1946年には4万の人々が第二次十字軍800周年を記念して、地方ごとに十字架を背負って運び上げ、聖堂内に嵌めこんでいる。ヴェズレーのタンパンの背後に、十字軍の雄叫びや、若者達の雨中の歌を聞いたような気がしたのは錯覚なのだろうか。

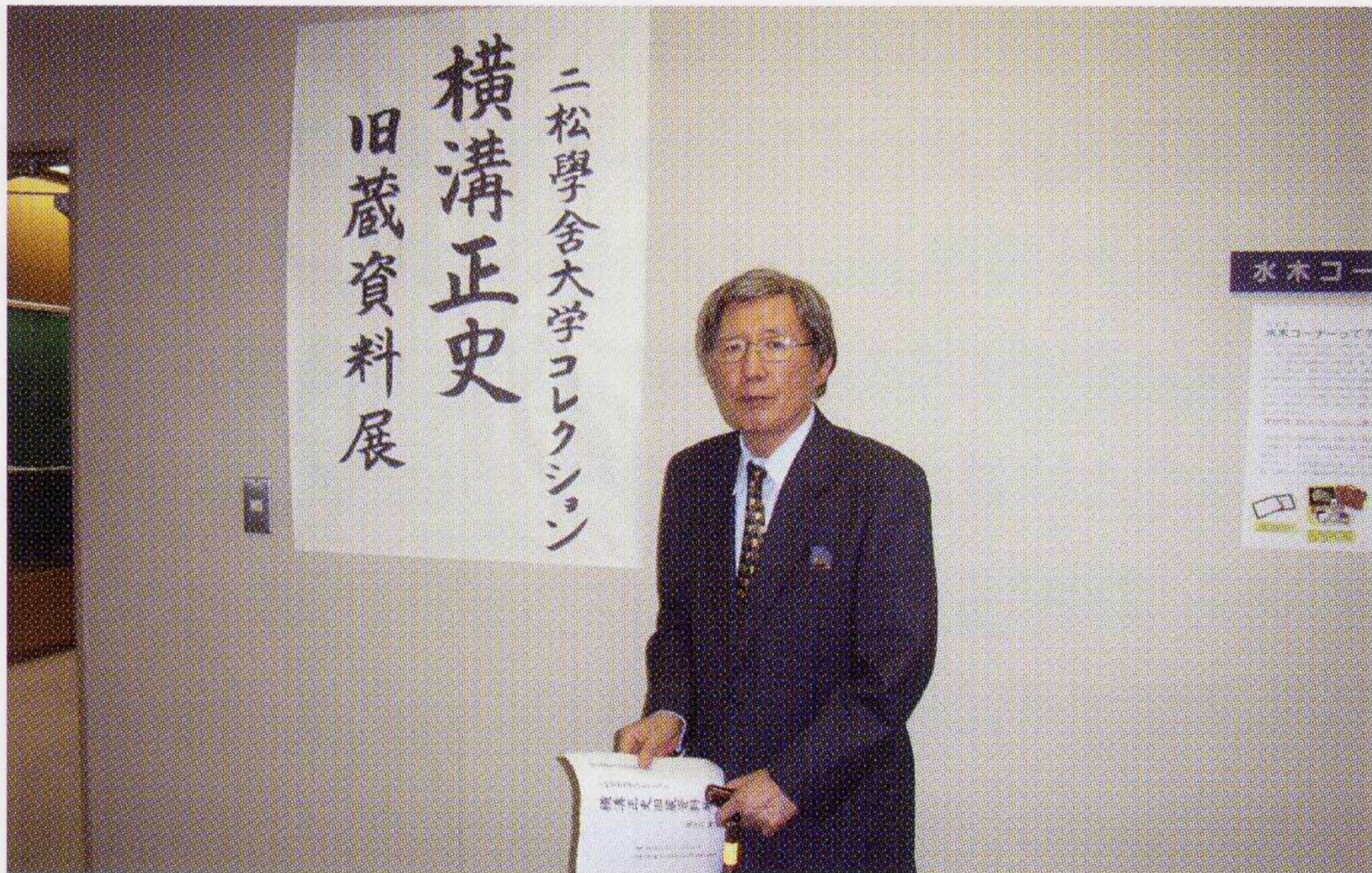


柏市と4大学 合同企画展 開催

10月27日(月)～11月9日(日)は秋の読書週間でした。

「読書の秋」を迎え、千葉県柏市立図書館と柏市内の4大学(二松学舎大学、日本橋学館大学、麗澤大学、東京大学)との合同企画展が初めて開催されました。

本学柏校舎図書館では、「横溝正史旧蔵資料展」を10月20日(月)～25日(土)まで開催しました。



展示会場入口にて 横溝亮一氏



展示会場にて



展示会場にて



今回の企画展については、新聞でも大きく取り上げられました。



読売新聞10月23日(朝刊)

「犬神家の一族」や「八つ墓村」などで知られる推理小説家、横溝正史(1902～1981)の原稿や遺品などの資料を展示した市民に読書に親しんでもらおうと、柏市立図書館と合同で開催した。

二松学舎大では、一昨年、東京都世田谷区の横溝の自宅で見つかった原稿や遺品などの資料約2400点を国文学の研究所として一括購入。今回そのうち約40点を展示した。

「八つ墓村」の草稿や、複雑な人間関係が謎解きの重要な要素となつている「犬神家の一族」の家系図の下書き、愛用の眼鏡や辞書、愛読していた海外の探偵小説、日本を代表する推理小説家・江戸川乱歩が横溝にあてた物語の始まりにこだわった

図書館「秘蔵」の品見に来て

柏市内の四つの大学図書館の「秘蔵」資料が、20日(一部は21日)から一般公開される。市民に開かれた図書館をPRしようと、読書の秋に合わせ、柏市立図書館と合同で企画した。

4大学の施設 きょうから

市民に開放アピール

二松学舎大学付属柏図書館(同市大井、04・7191・8755)は20、25日、推理作家、横溝正史の資料展を開く。2年前に旧横溝邸で見つかり、同大が購入した2600点の資料と4千冊の蔵書の中から、探偵・金田一耕助が活躍する「犬神家の一族」「八つ墓村」の草稿や、創作の参考にした洋書や洋雑誌などを展示する。東京・九段キャンパスで公開されたことはあるが、柏では初めて。25日には、長男・横溝亮一氏の講演会「父・横溝正史を語る」もある。入場は、先着150人。

麗澤大学図書館(同市光ヶ丘、04・7173・3668)の企画は「19世紀のイギリスと日本における出版文化」。近代デザインの創始者といわれるウィリアム・モリスが設立した印刷所「ケルムスコット・プレス」の出版物や、江戸期の和装本を展示する。20、31日(26日休館)。

日本橋学館大学図書館(同市柏、04・7167・8665)は20日、11月8日(11月2、3日休館)、18世紀後半に出版された英国の演劇全集を展示。10月25日には、安田比呂志・准教授が「イギリス18世紀古書『ベル演劇全集』とちよつと変わったシェイクスピアの世界」と題し、講演する。

東京大学柏図書館(柏市柏の葉、04・7136・4220)は、東京帝国大学の13代総長で、旧日本海軍で軍艦の設計にあたった平賀譲(1878～1943)の文書展を開催。21、27日(26日休館)。

柏市立図書館本館は21日、11月1日(27日休館)、柏の近現代史を伝える本や写真を展示する。

いずれも無料。

朝日新聞10月20日(朝刊)

柏市と4大学 合同企画展

なお、各大学の企画展・講演会の内容は、以下のとおりです。

市立図書館・市内大学図書館合同企画展のご案内					
大学図書館名	東京大学柏図書館	麗澤大学図書館	二松学舎大学附属図書館(柏)	日本橋学園大学図書館	柏市立図書館(本館)
1 企画展示名	平賀謙文書展	19世紀のイギリスと日本における出版文化(ケルムスコットプレスと江戸後期絵入り物語本)	横溝正史旧蔵資料展	イギリス18世紀古書「ペル版演劇全集」～ちょっと変わったシェイクスピアの世界～	柏の「まち」を知る 歴史資料・写真展
2 企画展の概要	平賀謙氏(1878-1943)東京帝国大学第13代総長の遺品から貴重資料を展示し、専門の艦船設計者及び総長としての足跡をたどる。	イギリスケルムスコットプレス(ウィリアムス・モリス設立の私設印刷工房)の出版物と田中文庫和装本の一部を展示し、19世紀のイギリスと日本の出版文化を紹介。	探偵・金田一耕助を生んだミステリー作家、横溝正史旧蔵の2600点に及ぶ資料と4000冊の蔵書の中から、「犬神家の一族」「八つ墓村」の草稿や創作の参考にした洋書・洋雑誌などの一部を展示紹介する。	入手がほとんど不可能といわれる5種類の演劇全集のうち、「シェイクスピア」上演版全集(1773年:復刻版)、「ペル版演劇全集」(1776年:オリジナル)、「ペル版演劇全集補遺」(1782:復刻版)、そして「ペル版演劇全集(改定版)」(1790年:オリジナル)を展示。	柏の近代史と柏が発展してきた戦後の歴史にスポットをあてた本・写真等を展示。 「土村誌」(大正11年発行) ・柏市勢35年の軌跡 ・事業史(柏駅東口市街地再開発事業) 他 ・戦後のかしわ写真展
3 開催場所と開催日時	東京大学柏図書館 1階 コミュニティサロン展示ケース、パネル 10月21日～10月27日 (26日休館) 9時～21時 (24・25日は17時迄)	麗澤大学図書館 1階 ロビー展示コーナー 10月20日～10月31日 (26日休館) 9時～21時半 (25日は17時迄)	二松学舎大学附属図書館(柏) 3階 展示資料室 10月20日～10月25日 (休館日なし) 9時15分～18時55分 (25日は16時迄)	日本橋学園大学図書館 展示台 10月20日～11月8日 (11月2～3日休館) 9時～18時 (25・26日は17時迄、 1・8日は12時迄)	柏市立図書館本館 ロビー展示台 10月21日～11月1日 (27日休館) 9時半～19時迄 (21・25・26・28・1日は 17時迄)
4 問い合わせ先	合田(ごうだ) 柏図書館専門員 電話:7136-5710	堀江図書館事務課長 電話:7173-3685	高林柏図書館課長 電話:7191-8758	中田図書館事務室主任 電話:7167-8655	諏訪部・染谷 図書館本館 電話:7164-5346

市立図書館・市内大学図書館合同講演会のご案内			
大学図書館名	二松学舎大学附属図書館(柏)	日本橋学園大学図書館	柏市立図書館(本館)
1 講演会テーマ	「父・横溝正史を語る」 講師:横溝亮一氏 (故横溝正史氏長男)	イギリス18世紀古書「ペル版演劇全集」 ～ちょっと変わったシェイクスピアの世界～ 講師:安田比呂志氏 (日本橋学園大学美術芸術専攻准教授)	「商都「柏」の歴史をふりかえってみませんか？」 ～「聞き伝え」にぎわいのまち柏ができるまで～ 講師:間瀬 信一氏(柏ロータリークラブ名誉顧問) 藤田とし子氏(かしわインフォメーションセンター事務局長) 「今谷上町のいま・むかし」 ～地域ボランティアによる歴史資料づくり～ 講師:木野 耕三氏 (今谷上町歴史実行委員会 代表)
2 開催場所	二松学舎大学柏校舎 1号館2階205教室	日本橋学園大学 2号館402教室	アミュゼ柏 1階7ラゲ
3 開催日時	10月25日(土) 13時30分～14時30分予定	10月25日(土) 10時30分～12時予定	10月31日(金) 14時～16時予定
4 申込み方法	当日会場先着150名	10月16日 9:00から 電話(7167-8655)受付 先着100名	10月16日 9:30から 電話(7164-5346)受付 先着120名

横溝亮一氏講演会

今回の柏市立図書館・市内大学図書館合同講演会に協賛し、本学では、横溝正史長男の横溝亮一氏に講演をお願いしました。

講演題目は「父・横溝正史を語る」でした。新聞、大学ホームページ、ポスター、柏市広報等で取り上げたこともあり、

多くの柏市民や遠くは名古屋からも熱心なファンの方がお見えになりました。

午後1時30分からの講演は、予定時間を超えて2時45分に盛況裡に終わりました。



熱心に聞き入る参加者



講演中の横溝亮一氏

開館日 案内

12月の開館日案内 (補…補講期間 終…年内授業終了)

九段				柏	
	9:00 ~ 21:30	1	月	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	2	火	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	3	水	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	4	木	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	5	金	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 16:20	6	土	9:15 ~ 16:00	
	閉館	7	日	閉館	
	9:00 ~ 21:30	8	月	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	9	火	9:15 ~ 18:55	
補	9:00 ~ 21:30	10	水	9:15 ~ 18:55	補
補	9:00 ~ 21:30	11	木	9:15 ~ 18:55	補
	9:00 ~ 21:30	12	金	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 16:20	13	土	9:15 ~ 16:00	
	閉館	14	日	閉館	
	9:00 ~ 21:30	15	月	9:15 ~ 18:55	
	9:00 ~ 21:30	16	火	9:15 ~ 18:55	
補	9:00 ~ 20:00	17	水	9:15 ~ 18:55	補
補	9:00 ~ 20:00	18	木	9:15 ~ 18:55	補
補	9:00 ~ 20:00	19	金	9:15 ~ 18:55	補
補	9:00 ~ 16:20	20	土	9:15 ~ 16:00	補
	閉館	21	日	閉館	
終	9:00 ~ 21:30	22	月	9:15 ~ 18:55	終
	閉館(天皇誕生日)	23	火	閉館(天皇誕生日)	
	閉館(冬期休業期間)	24	水	閉館(冬期休業期間)	
	"	25	木	"	
	"	26	金	"	
	"	27	土	"	
	"	28	日	"	
	"	29	月	"	
	"	30	火	"	
	"	31	水	"	

- 12月1日(月)から冬期休業中の長期貸出を開始します。返却期限は1月14日(水)です。
- 補講・試験期間中、九段図書館は20時閉館となります。(10日/11日を除く)
- ※ 開館または閉館時間を変更しています。ご注意ください。
- ※ 開館時間等が変更になる場合は、随時、訂正版や掲示等でお知らせします。

読書週間

図書館では、秋の読書週間に合わせて、読書推進キャンペーン(10月27日(月)~11月10日(月))を開催しました。九段校舎図書館、柏校舎図書館ともそれぞれテーマを決めて、読書推進に取り組みました。



九段校舎図書館



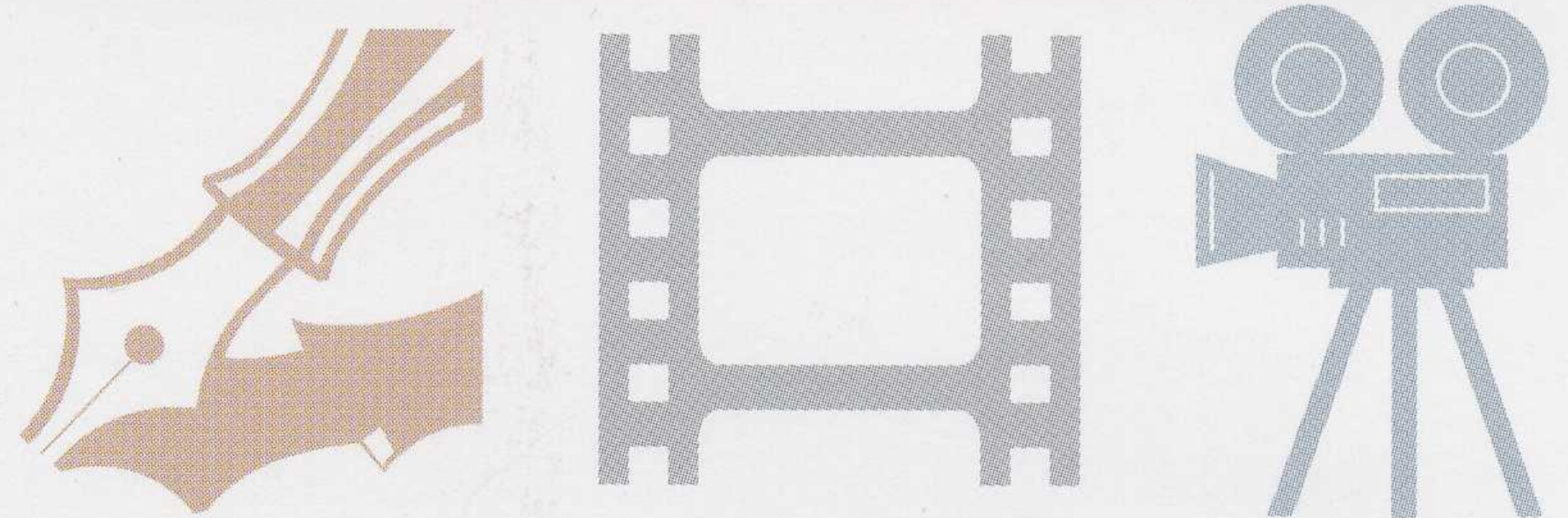
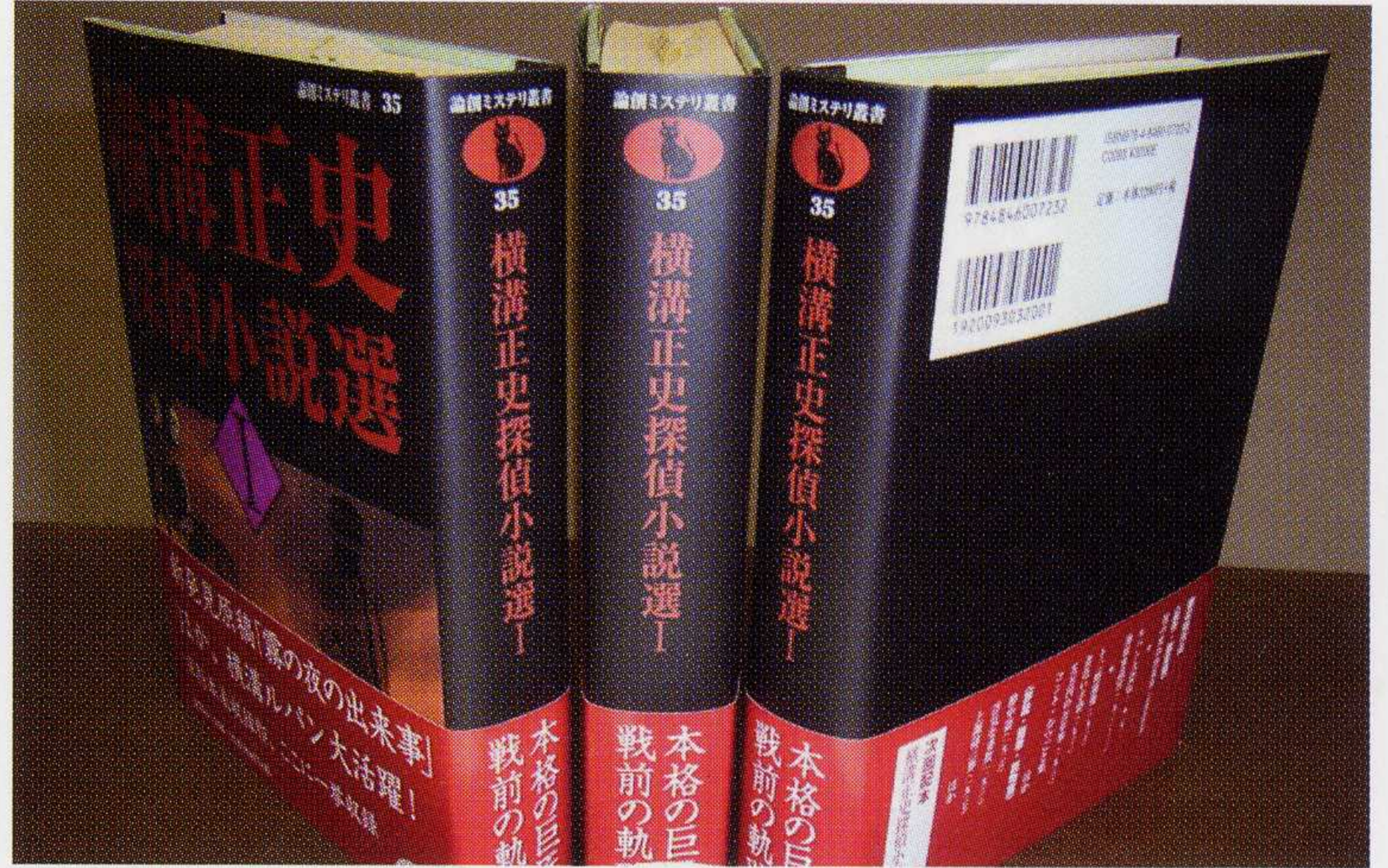
柏校舎図書館

開館時間変更

九段校舎図書館では、開館時間に変更となりました。従来より20分早め、9時開館となりました。閉館時間は従来通りです。

横溝本発行案内

『横溝正史探偵小説選 I』(論創ミステリ叢書35)として、論創社から2008年8月に発行されました。定価3200円+税。この小説選には、本学所蔵の未発表原稿「霧の夜の出来事」が収録されています。この原稿は、2006年に世田谷の旧宅で発見された未発表原稿で、200字詰め原稿用紙66枚です。



表紙解説

『探偵作家クラブ賞』表彰状 『ブロンズ像』(ポー像)

「第1回探偵作家クラブ賞表彰状」は江戸川乱歩自筆の表彰状(昭和23年2月28日)。江戸川乱歩の横溝正史に対する思いが伝わるものである。「ブロンズ像」(ポー像)は、後年副賞として与えられるようになったが、横溝正史が探偵作家クラブ賞受賞の時にはなく、これも副賞としてブロンズ像を授与するようになってから、遡って横溝に贈られた。台座横に「1948 横溝正史君」のプレートがある。

二松学舎大学附属図書館 季報 第70号

発行日 平成20(2008)年11月20日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話:03-3263-6364

柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話:04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話:03-5614-2515